

あとがき

平成十年の夏、私は生まれてはじめて合掌造りの建物を見た。富山から白川村に向かう国道から、五箇山の菅沼の合掌造りの建物が見えたとき、「なんだ、これは」ととても驚いた記憶がある。その後何度となく合掌造りの建物を見ているけれども、いつもすごいなあとその迫力に圧倒されるのである。

白川村にかかわったのは荻町の伝統的建造物群保存地区の「景観」の調査がきっかけだった。当初は「俗っぽい看板や、休耕田はけしからん！」という勢いで景観の調査を始めたのだが、荻町を歩き回ってたくさんの人と話をして少しずつ私の中の「すべき」という語尾が抜け落ちてゆき、いまの景色があるのは生活の必然なのだ、と思うに至るまでにそう時間はかからなかった。

「景観」に始まった白川村の調査をその後研究へと広げ、「白川村荻町における文化的景観の保全に関する研究」として博士論文にまとめたものが本書の下敷きになっている。論文で使用した「景観」という言葉はその後「景観法」ができて制度的なイメージが強くなってしまったので、本書では状況に合わせて主観的に「景観」と言ったり「景色」、「風景」と言ったりして定まっていなことをお断

りしておきたい。

いろいろなところで白川村の話をすると、「ではあなた自身は白川村がどうなれば良いと思いますか?」と質問されることがある。とても困る質問である。本書ではさまざまな視線について書いたのだが、私自身の視線は全く定まっていなからである。本文中にもそうした揺らぎや不安定さが露呈していることと思う。住んでいる人にとってより良い「村づくり」ができれば良いと言ってしまうのも偽善的だし、文化財は正しくまもられるべき、と言いきれるほどの自信もない。ただ、そうした不安定な視線から、いろいろな側面を相対的にとらえようと試みたつもりである。視線は定まらないものの、私自身は白川村が大好きで、見るもの聞くものワクワクすることはかりなのだが、本書を通して白川村での楽しい雰囲気少しでも伝われば幸いである。

三章の意識のところでは述べた内容は多くが、私がお手伝いをした(財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団の調査の結果によるものである。財団の皆様にはいつも暖かく迎えていただき本当に感謝している。また、本書を書くにあたり多くの方のお世話になった。白川村の調査のきっかけをあたえてくださった筑波大学大学院人間総合科学研究科斎藤英俊教授をはじめ、観光の調査を一緒に行った同羽生冬佳准教授、博士論文の指導をくださった東京大学大学院農学生命科学研究科下村彰男教授、小野良平准教授、白川村研究の先駆者である宇都宮大学名誉教授柿崎京一氏、九州大学大学院芸術工学研究院西山徳明教授など多くの研究者の方から励ましやヒントや叱咤激励をいただいた。また、(財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団の松本継太氏ほか職員の皆様、白川村教育委員会の近藤久善氏、前任者の板谷孝明氏、向長和氏をはじめ本当にかくさんの白川村の方にお世話になった。また、細江篤史様に

は細江光洋氏の貴重な写真を快く使わせていただいた。この場をかりてお礼申し上げたい。最後に、論文の執筆を支えてくれた大阪の両親と、本書の執筆を暖かく見守ってくれた夫、渡辺俊に感謝する。

平成十九年八月 つくば市にて

黒田乃生